

The Standard



Volume 2

The Domus chair by
Ilmari Tapiovaara
and four other highlights from Artek

artek



「チェアはただ単に腰かけるためのものではない。インテリアすべての鍵である」とタピオヴァーラが語ったように、ドムスチェアはさまざまなライフシーンに対応するためのディテールまで細かく設計されています。

The Domus Chair by Ilmari Tapiovaara

ドムスチェア

小さなアームレストと 三次曲線の座面が生み出す 快適な座り心地

1946年、イルマリ・タピオヴァーラとその妻アンニッキは、ヘルシンキ市内に新たに建設された学生寮「ドムスアカデミカ」の内装設計を担当しました。そのプロジェクトのなかで生まれたのが、この「ドムスチェア」です。あらゆるシーン、シチュエーションに柔軟に対応する多目的な椅子として長年人気を博しています。

ドムスチェアは当初、寮に暮らす学生たちが部屋で本を読むときに使う椅子として開発されたものでした。そのため、タピオヴァーラは学生たちが長時間机に向かったときにも疲れにくく、きちんとした姿勢を促す形を求めました。一方で、軽量でスタッキングが可能といった機能面も考慮しています。

当時のフィンランドは、戦後まもないことから、産業はまだ乏しかったものの、天然資源であるパチ材を切り出した合板の生産は盛んに行われていました。タピオヴァーラは座面を積層合板にする一方で、椅子全体の重さを支えるフレームには強固な無垢材を使用するなど、目的に応じて異なる材種を使い分けています。小さく突き出た特徴的なアームレストは、肘置きとしての役割をきちんと果たしながら、テーブルに椅子を引き寄せやすいようにとデザインを考案したものです。

アルヴァ・アアルトが二次元で木を曲げる方法を追求したのに対し、タピオヴァーラはより身体にフィットするように三次元で積層合板を成形する技術を開発。だからこそ、この椅子は座り心地がよいのです。

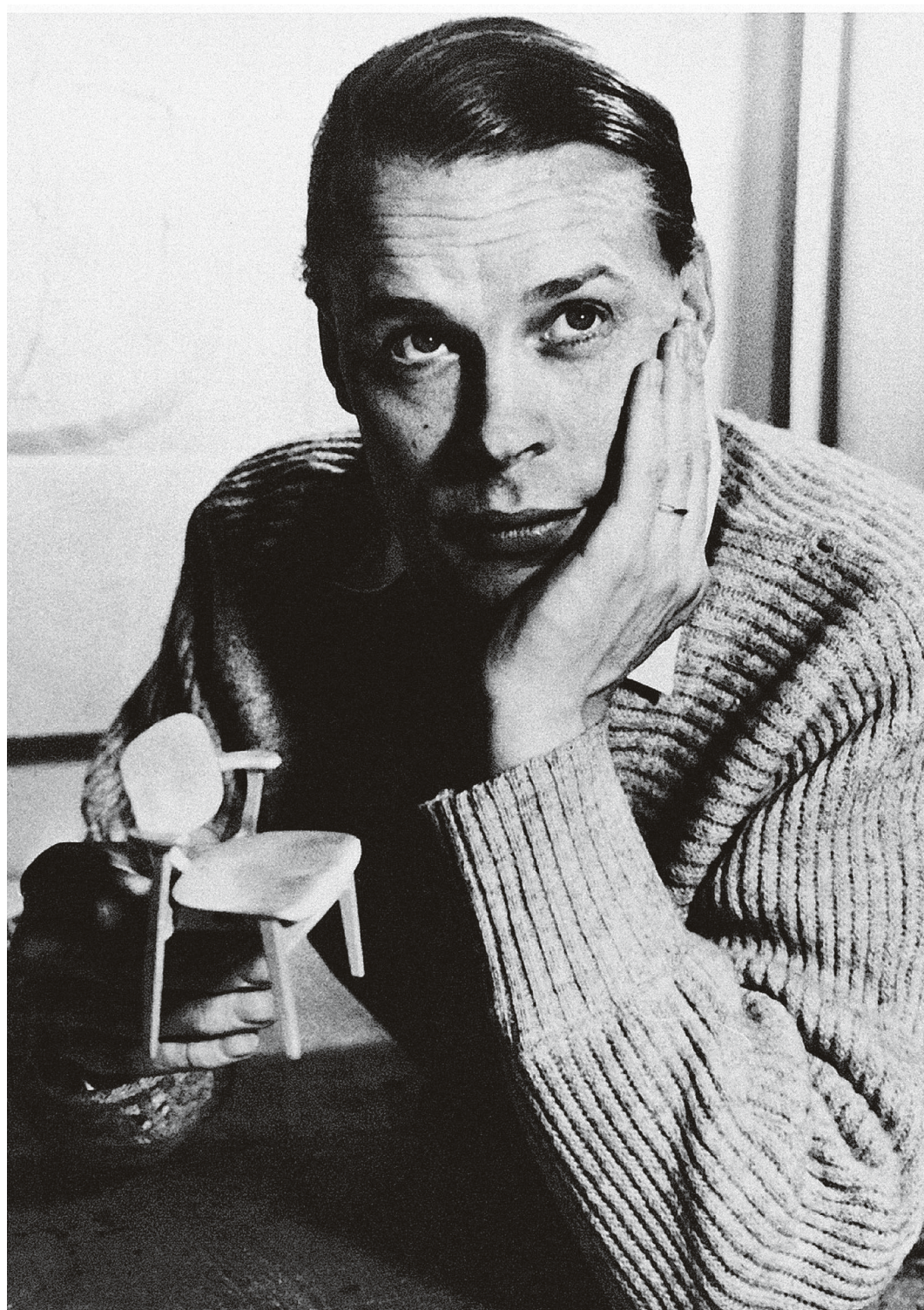
ドムスチェアは、フィンランド生まれの家具として海外にも多く輸出され、高い評価を受けました。イギリスでは「スタックス」、アメリカではノル社が「フィンチェア」という名前で販売。1951年に開催されたミラノトリエンナーレでは見事金賞を受賞し、タピオヴァーラの名前も一躍世界中で知られるようになります。

ドムスチェアは、学校はもちろん市民ホールや病院、駅舎などの公共施設で頻繁に使われていますが、その快適な座り心地から、家庭用のダイニングチェアとして使う人も増えています。また、タピオヴァーラは、ドムスアカデミカの共有スペースのために「ドムスラウンジチェア」(※1)もデザインしました。ともに2010年にアルテックの製品として発表され、さまざまな仕上げ、素材、張り地のバリエーションが揃っています。



イルマリ・タピオヴァーラが1960年にデザインを手がけた「キキラウンジチェア」。フレームに楕円形のスチールを使うことで、椅子のフォルムをすっきりシャープにまとめ、極めて現代的な装いに仕上げています。





ドムスチェアの模型を手に、カメラにポーズを取るイルマリ・タビオヴァーラ。この椅子には、東部戦線への赴任中、カレリアの森で触れた民芸と木の美しさに感銘を受けた思いがたっぷりと詰まっています。

Ilmari Tapiovaara

イルマリ・タピオヴァーラ

モダニズムと工芸の融合を目指し 人々のためにデザインを発展させた フィンランドの隠れた巨匠

1914年フィンランドのハメーンリンナに生まれ、ヘルシンキの大学ではアートと家具デザインを専攻したイルマリ・タピオヴァーラ。アルヴァ・アアルトの影響を強く受け、モダニズムの概念を追求する一方、持続的な生産体制により、高品質かつ適正な価格の家具を供給し、すべての人々の暮らしが豊かになるようにと真剣に考えていたデザイナーです。

11人兄弟の中で育ったタピオヴァーラは、映画監督だった兄、ニルツキの頼みで作品ポスターを手がけるなど、早くからその芸術的センスを開花。さらにパリに赴くとル・コルビュジエの事務所に務め、これを機に世界へと目を向けるようになります。

38年、彼はヘルシンキの北にあるラハティの大手家具メーカーのアートディレクターに就任しますが、ほどなくしてソ連がフィンランドに宣戦布告し、第二次世界大戦へと突入します。戦時中に赴任した東部戦線で、タピオヴァーラは限られた道具と資材で兵士のための施設や家具の製作を担当。この経験を通じて、いかに最小限のリソースで最大の快適性を生み出すことができるのかを考えるようになります。また、ロシアとの国境地帯にある東カレリア地方で見た伝統工芸からも大きな影響を受けました。

戦争が終わると、より良い暮らしを求める民衆のために、タピオヴァーラは量産可能な家具の開発に注

力するようになります。46年にドムスアカデミカのプロジェクトを成功に導いたことで、一躍その名を広めます。51年には妻のアンニッキとともに自身の事務所を設立。若き日のエーロ・アールニオなど才気あるデザイナーたちを所員に迎え、後進の育成にも積極的に取り組みます。

同年にヘルシンキ工科大学の学生寮の内装プロジェクトのために椅子「ルツキ」を開発。その後、56年に「ナナ」、60年に「キキ」といったスチール製の家具を次々に発表します。一方で、いまだ木製家具が主流だった一般市場向けには、55-62年にかけて「ピルッカシリーズ」、56年に「マドモアゼルチェア」などの人気シリーズも手がけます。こうした活動の脇で、国連を通しパラグアイ、モーリシャス、ユーゴスラビアなどの新興国を訪れ、デザインコンサルティングも行っていました。(※2)

イルマリ・タピオヴァーラの活動は、いつの時代も社会のニーズに適切に対応した「人々のためのデザイン」という考え方に根ざしていたと言えるでしょう。戦中戦後の厳しい環境のなかで、民衆が本当に必要とする有効なものづくりを実直に目指したタピオヴァーラ の精神は、時代や地域の差異を超えて、いまでも世界中の人々の心に響き渡ります。



1956年にタピオヴァーラがデザインした「マドモアゼルラウンジチェア」。昔懐かしいスポークチェアの構造はそのままに、座面やエッジを丸くカーブさせて、表情を柔らかく見せています



1955年に発表した「ピルツカスツール」。フィンランドらしい素朴な表情を捉えながらも、現代の暮らしの風景にも似合うすっきりとしたデザインに仕上がっています。シリーズにはベンチやテーブルなども揃っています。

Ronan & Erwan Bouroullec

ロナン&エルワン・ブルレック

歴史を受け継ぎ、次のステップへ ブルレック兄弟がつくりあげた 美しく、力強いアーチ

アルテックの製品には半世紀前、古いものでは80年以上前にデザインされたものも含まれていますが、そのどれもが長きにわたり人々に愛され、現代においてもなお新鮮な感覚で受け入れられています。フィンランド産の木材やリノリウム、天然繊維の張り地など、アルテックは創業当初からずっと同じ素材を使い続けることで、時代に左右されないタイムレスな魅力を保つとともに、新しいエッセンスを取り入れながら、独自の進化を続けてきました。

そして2014年、フランス人デザイナーのロナン&エルワン・ブルレックとの協働により生まれたのが新しいシリーズ「カアリ」です。

カアリは、アーチ状に緩やかに湾曲した薄いスチール板を木製パーツと組み合わせることで、美しさを兼ね備えた丈夫でシンプルな構造体を実現。これをテーブルやデスクの脚、シェルフの支えとなる部分に応用しています。木製天板にはラミネートやリノリウムといったアルテック従来の仕上げを施し、スマートで現代的な仕上がりにまとめています。

「デザイナーとしてデビューした頃から、アルテックは僕たちにとって特別な存在でした」

それだけに、強烈なプレッシャーを感じていたとブルレック兄弟は語ります。

「当初は僕たちが新しくデザインを起こすべきかどうか真剣に悩みました。しかし、アアルトが、L-レグのようにひとつの部品からさまざまな家具に応用するシステムを開発したように(※3)、基盤となる仕組みからデザインを考えることが、自分たちに課せられた役割だと思うようになりました」

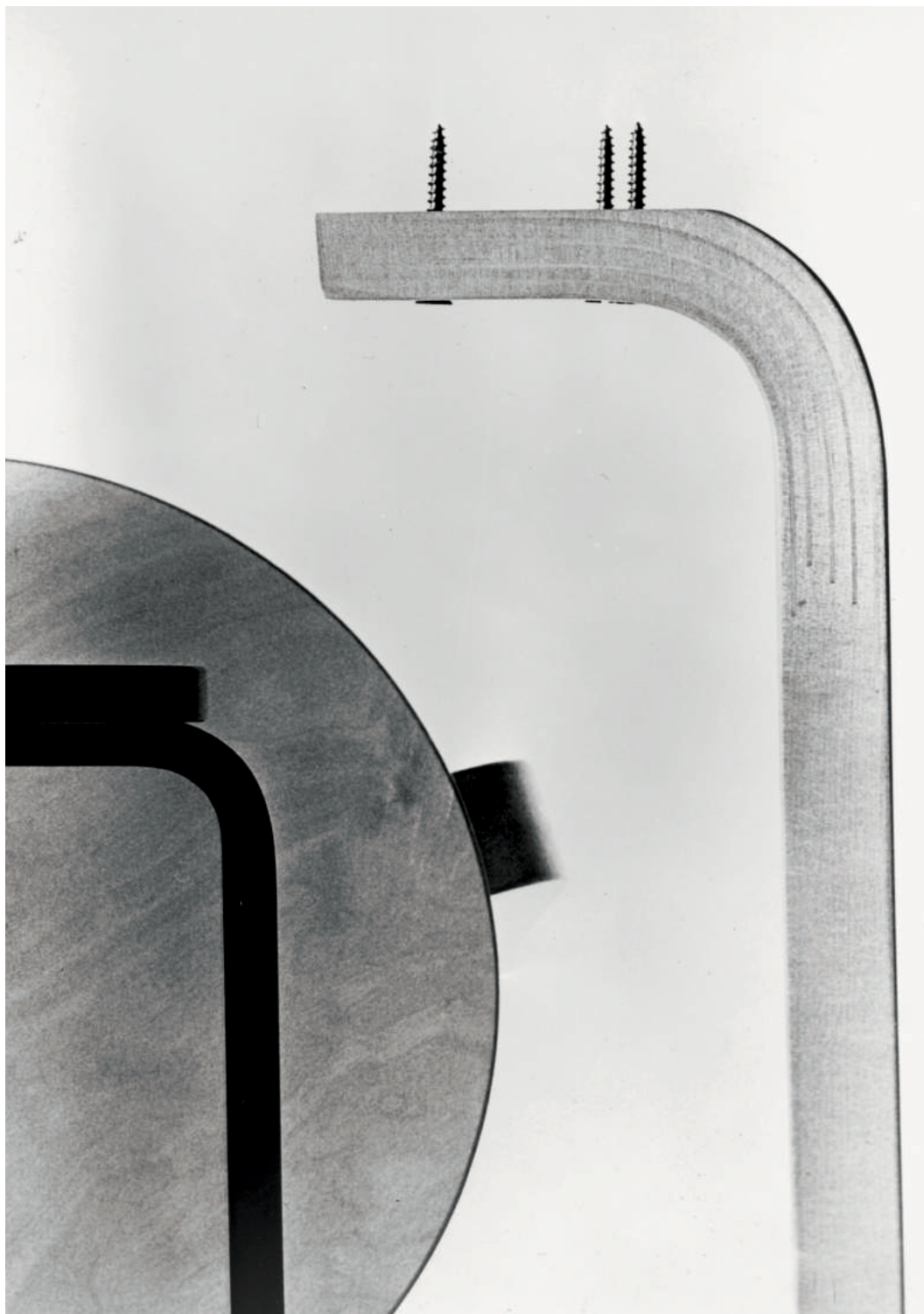
自然豊かなフランス北西部のブルターニュ地方の海辺の街に生まれ育ったブルレック兄弟。故郷の風景はどことなくフィンランドに似ていると語ります。簡潔で静謐ながら、生活のニーズに対応したもののづくりの裏にあるのは、彼ら自身の豊かな暮らしの体験なのではないでしょうか。

歴代の名作と同様の思想(※4)を受け継ぎつつ、オリジナリティ溢れる表現を実現したカアリの登場は、アルテックが歴史と伝統を守りながら、現在進行形で躍進し続けていることを示しています。カアリは今後もさらにシリーズ展開を行っていく予定です。



ロナン&エルワン・ブルレックがデザインした「カアリ」は、2015年に発表。テーブル、シェルフ、コンソールなど、異なるプロダクトに展開しながらも、それぞれにしっかりと同じサポートシステムを使っています。





曲げ部分にいくつもの切込みを入れることで、強度の高い無垢材に柔軟性をもたせた「L-レッグ」。1933年に特許を取得したことで、アアルトの類稀なる発想力と開発力に世界中から注目が集まりました。

Alvar Aalto's bentwood

アルヴァ・アアルトと曲げ木

フィンランド近代デザインの父 アルヴァ・アアルトが開発した 究極の曲げ木技術

1929年、アルヴァ・アアルトはフィンランド南西部のトゥルク郊外の工場で、家具職人のオット・コルホネンとともに強固な無垢材を直角に曲げる技術の開発に挑戦します。その結果生まれた「L-レッグ」は、1933年に特許を取得。これをきっかけに、アアルトはL-レッグをパーツに使用した一連の家具を発表していきます。アアルトはL-レッグのことを「建築における柱の仲間ともいえる構造的要素」と考えていました。家具を支える水平面から垂直に伸びるL-レッグの構造は、彼の建築の意識にも共通するものがあったからでしょう。

L-レッグの仕組みは、とてもユニークです。まずは無垢材に数ミリ間隔で入れた複数のスリットに接着剤をしっかりと流し込み、そこに薄板をはめ込みます。これにより角材と薄板の接合部分に強度と耐久性に加え、柔軟性を与え、90度に曲げることを可能にしたのです。L-レッグを用いた家具シリーズは1933年6月、第5回ミラノトリエンナーレで発表され、翌々年アルテックは創業を迎えました。

アアルトは、L-レッグをベースにアイデアを発展させながら、さらに新たな開発に取り組んでいきます。2つのL-レッグを組み合わせたプロトタイプを元に、1946

年には、2つの直角を持つY-レッグを発表。さらにL-レッグの仕組みを応用し、扇状のユニークな形をしたX-レッグも開発しました。

アアルトはほかにも多くの加工技術を開発していますが、そのなかでも代表的なのが「ラメラ曲げ木」です。ラメラ曲げ木とは、バーチ薄材を同じ木目方向に重ねた積層合板を曲げる技法であり、柔軟性を保持しながらも、無垢材のような見た目と手触りを兼ね備えています。この技法は、ループ型の「41アームチェアパイミオ」(※5)カンチレバー型「400アームチェアタンク」(※6)などに適応され、現在でもトゥルクの工場(※7)で作られています。

技術的なアプローチだけでなく、彫刻にも似た抽象美を木工の世界に持ち込んだのもアアルトの功績でしょう。木の繊維の声に耳を傾け、木材を曲げていく。このように自然の声を反映するという姿勢は、レンガの壁、コンクリートの扉、そしてガラスの器に至るまで、アアルトのすべての作品に共通するものです。

自然とテクノロジーの共存を目指すことこそ、アアルトのデザイン哲学であり、彼の生き方そのものだと言えるでしょう。



「L-レッグ」に高さのある背もたれをつけた「66チェア」はアルヴァ・アアルトが1935年に開発したもの。背面の空いた部分に手をかけ、気軽に持ち運びができる、使い勝手の良いダイニングチェアです。



Artek 2nd Cycle

アルテック セカンドサイクル

時を超えて何度も愛され続ける クラシックで美しい アルテックの家具たち

「ある日、アルテックの工房で働いていた職人が仕事からの帰り道で、赤い塗装が少し剥がれ、そのあいだから緑色のペンキが顔を覗かせている古びたスツールを見つけました。その座面を見て、これはもしかしてパイオサナトリウムのホールで使われていたうちの一脚だったのかもしれないと想像がふくらみます。そして、それを譲り受けた人が、きっと自分の好みで塗り替えて、その後、新しい家具に買い替えるときに手放してしまったのかもしれませんが。そういった歴史の積み重ねこそが、この椅子をもっとも美しい姿にしていると思うのです」(2011年 2nd Cycleのプレスリリースより)

アルヴァ・アアルトと妻アイノは、アートコレクターであり幅広い芸術活動をサポートしていたマイレ・グリクセン、美術史家のニルス＝グスタフ・ハールとともに、1935年10月、ヘルシンキでアルテックを創業しました。生活意識の向上と商業的成功を同時に見据えたビジネス展開は、家具の分野においてはそれまでに例を見ないものでしたが、先見の明を持ったメンバーは持続可能な生産体制(※8)を整えることで、夢を現実のものにしていきました。彼らの強い意志は、80年以上を経た今日でも、アルテックのもののづくりのなかに脈々と受け継がれています。

機能的で使いやすく、気軽に暮らしのなかへと取り入れられるアルテックの製品には、時代に左右されないタイムレスな魅力があります。特に近年においては、ずっと長く使い続けたい、本物を生活に取り入れたいと考える傾向が一般的になっており、経年変化を重ねた素材が味わい深いと評価される傾向にあることで、アルテックのヴィンテージも人気を集めています。

数年前からアルテックでは、骨董市や学校、倉庫などをまわって自社の製品を回収。こうしたクラシックなアイテムの歴史を引き継ぎ、それらに新たな生命を吹き込み、現代に生きる人々に提供するために「2nd Cycle(セカンドサイクル)」というプロジェクトを立ち上げました。

2nd Cycleを通し、愛着をもって長く使われてきた家具に感謝と敬意を表明するために、2011年、ヘルシンキに「2nd Cycle Store」(※9)をオープン。店内には、アルヴァ・アアルト、イルマリ・タピオヴァーラ、ウルヨ・クッカプロなど北欧モダニズムの基盤をつくりあげた巨匠たちの作品をはじめ、ここでしか見つけれないアイテムばかりを揃えています。



ヘルシンキ中心部にある2nd Cycle Storeの店内。アルテックのオリジナル製品を中心に、数々の秀逸なデザインプロダクトが集められています。



製造から何十年過ぎ、ペイントは剥がれ落ちてしまったものの、椅子としてきちんと機能し、スタッキングされた姿もさまになっている「スツール60」。この使い古された姿にも新たな価値を見出すことができます。



オリジナルには存在しないベビーブルーの「69チェア」。おそらく、所有していた人が、インテリアと合わせるために自身でペイントしたもの。こうした商品も2nd Cycle Storeにはたくさん並んでいます。

Notes

1. 「ドムス ラウンジチェア」

イルマリ・タピオヴァーラ、1946年



2. 国連の産業開発部門の仕事を従事していた1974年、モーリシャスのビーチに立つタピオヴァーラ。早い時期から世界に目を向け、それぞれの国の異なる背景のもとに根ざす文化をデザインで融合することで、世界中の人々の意識をも近づけることができると信じていた。



3. アアルトが発案した「L-レグ」のシステムは、「スツール60」のために開発されたものでしたが、その後すぐに次々とファミリーを増やし、アルテックのスタンダードコレクションに展開されていきました。さまざまなサイズのL-レグが椅子やテーブルなどにも使われ、バリエーションも豊富に。もとは特定の目的のためにデザインされたものですが、一つの部品をさまざまな家具に応用していくシステムの開発によりデザインを発展させたことで、アアルトは、住宅やオフィスはもちろん、レストラン、ホテ

ル、学校、図書館、商業施設など、多様なスペースで使うことができる家具を作り出したのです。



4. フィンランドは1917年、ロシアより独立を果たしました。国としての歴史が比較的浅いフィンランドでは、建築やデザインが国民意識の形成に重要な役割を果たし、同時にこの国にモノを創造する力があることを世界に示してきました。デザインとは、特権階級の賛沢のためでなく、民衆の日常生活の一部となることを目的としたもの。だからこそ使い勝手がよく、機能的でありながら、さらにシンプルで美しくなければならない。これはアルテックが創業当時より受け継いできたものづくりの精神、そして製品そのものにも通じています。昔も今も変わらない果てしなく続く森とたくさんの湖に囲まれた豊かな自然と北欧特有の気候。フィンランド全世帯の5分の1は森林地帯に土地を所有しているという事実を見ても、単なるイメージだけでなく、どれほどこの国の暮らしが自然と近いところにあるかを示しています。だからこそ、アルヴァ・アアルトやイルマリ・タピオヴァーラのように、自然の形からヒントを得、天然素材とまっすぐに向き合った仕事をするデザイナーが生まれたのです。



5. 「41 アームチェア パイミオ」

アルヴァ・アアルト、1932年

アルヴァ・アアルトは1928年、フィンランドのパイミオ市にある結核療養所(パイミオサナトリウム)の建築、内装デザインに着手します。当初、スチールパイプを使った新しい家具を考案していましたが、スチールという素材の冷たさが、療養所という施設にそぐわないと思い直し、代わって、温かみのあるまったく新しい家具を生み出したのです。曲げ木の実験を繰り返す中で開発した「ラメラ曲げ木」の技法から、しなやかで有機的なカーブを描くループの輪を成型した「41アームチェアパイミオ」をはじめ、後にさまざまな製品に応用されました。



6. 「400 アームチェア タンク」

アルヴァ・アアルト、1936年

アルヴァ・アアルトは36年開催のミラノリエンナーレのために「400アームチェアタンク」をデザインしました。「戦車」と称されるこのアームチェアは、「ラメラ曲げ木」を用いることで、強固で幅広いバーチ材による滑らかなカンチレバーを実現しています。



7. アルテックの製品は、一点一点が手づくりではなく、量産体制を整えた工場で作られています。とはいえ素材の性質上、フルオートメーションの製造工程で作られているわけではありません。アルテックでは、熟練の職人たちによる厳しい管理のもと、適宜、機械加工の工程を取り入れています。多様な特殊加工も含まれるため、専門の職人が手作業で仕上げをしています。



8. アルテックが創業した1930年代のフィンランドは、インフラが十分に整っておらず、一方で輸入品は非常に高価でした。安定した価格帯の家具を供給するために、国内の天然木材を利用することは、経済的な理由から当然の選択でした。しかし考えてみれば、サステナビリティという概念が登場するはるか以前、太古の昔から人類は、自然の美しさを宿し、環境にも優しい木に親しんできました。年月を重ね使われることで味わいを深め、現代にそのタイムレスな価値を伝えるアルテックの製品には、ヴィンテージにも最新のコレクションにも変わる事のない、明快で実用性に優れた、シンプルな魅力があるのです。



9. Artek 2nd Cycle Store
住所: Pieni Roobertinkatu 4-6,
00130 Helsinki, Finland
電話: +358-50-5959262
<http://2ndcycle.artek.fi>



artek

東京オフィス
〒151-0051
東京都渋谷区
東京都渋谷区千駄ヶ谷3-59-4
クレストコート原宿101
info.jp@artek.fi

Facebook@ArtekJapan
Twitter@ArtekJapan

ヘルシンキ - 本社
Artek oy ab
Lönnrotinkatu 7
00120 Helsinki
Finland

本リーフレットに掲載されている商品は各販売店でご購入頂けます。
(入荷状況は店舗により異なります)
詳しくはWeb Siteをご覧ください。
<http://www.artek.fi/contacts/di/Japan>

Art Direction: Something Fantastic
Texts: Caroline Roux
Translation and edit: Hisashi Ikai

Image Credits
Cover and PP. 8-9: Zara Pfeifer
PP. 10-13: Studio Bouroullec
PP. 22-23:
2. Designmuseo
3. Welin, Artek
4. Tuomas Uusheimo, Artek
9. Rauno Träskelin, Artek
All other images: Artek

8 / 2016

アルテックは1935年、アルヴァ・アアルト、アイノ・アアルト、マイレ・グリクセン、ニルス＝グスタフ・ハールの4人の若者により「家具を販売するだけではなく、展示会や啓蒙活動によってモダニズム文化を促進すること」を目的に、ヘルシンキで設立されました。今日、アルテックのコレクションは、フィンランドの巨匠たち、そしてグローバルに活躍する建築家やデザイナーによる家具や照明器具、ホームアクセサリーが揃っています。才気あふれるクリエイターの独創的なビジョンを、斬新なテクノロジーを使って明快な表現へとまとめあげることこそ、アルテックのものづくりの真髄なのです。創業者の精神を受け継ぎ、アルテックは今日でもデザイン、アート、建築の交点に立ち、未来への道を切り開き続けています。

artek.fi